

26年度から国際学級の学びがさらに進化 充実した国際交流を通して 「世界に踏み出していく力」を育成

2024年度で20周年を迎えた、東京女学館中学校・高等学校の国際学級。2026年度からはクラス数を1から2に拡充し、世界で活躍できる女性の育成にさらに力を入れていく。国際学級では、世界への興味・関心を広げるイベントも定期的に実施しており、7月19日（金）には、エストニアの大学教授を招いた国際学級進路学習会が行われた。その様子をレポートするとともに、国際学級の先生と卒業生に学びの様子を伺った。

起業家輩出率1位のエストニア 日本との違いを考える

7月19日（金）、東京女学館中学校・高等学校で、生徒とその保護者対象の「国際学級進路学習会」が行われました。テーマは、「女性のアントレプレナーシップとこれからの未来に必要な力について」です。ヨーロッパで起業家輩出率1位を誇るエストニアで最大の私立大学、Estonian Entrepreneurship University of Applied Sciences (EUAS) からLy Höbe先生とMari Taalman先生が来日し、未来を切り開く精神について伝えました。本イベントは自由参加でありながら、当日は多くの生徒と保護者が訪れました。

まず、東京女学館・国際学級の卒業生であり、現在はエストニアと日本をつなぐ仕事で活躍している並木真衣さんが、エストニアとはどのような国なのかを映像とともに紹介しました。バルト三国で最も北にある同国は、自然豊かなサウナ大国としてよく知られていますが、国を挙げて行政・民間サービスのデジタル化に取り組んでおり、IT先進国としても名を馳せています。

エストニアは人口約130万人の小国であるにもかかわらず、ヨーロッパで起業家輩出率1位を達成しており、その約3分の1は女性です。これを実現できた理由について、「先生は、国を挙げて起業家精神を育てるアントレプレナーシップ教育に力を入れているためだと言います。」「起業家精神ということは、日本の多くの方は、自分のアイデ

アを形にしてビジネスにつなげる力を想像すると思いますが、起業家精神とは、私たちが生涯を通して持つべき心構えのことです。エストニアでは、これを幼稚園から大学まで学びます。グループワークを何度も行い、他者との協働で物事を探究して解決していく精神や、異なる国への文化的な理解力を育てることで、既存の価値観にとらわれず、新たな一歩を踏み出していくマインドが培われていくのです」と説明しました。

Ms. 先生は、起業家精神は自分の会社を持たなくても発揮できると言います。「たとえば先生は、副学長として起業家精神を発揮しながら、大学の課題を見つけて改善に取り組んでいます。起業家精神は、他者のために働くうえでも役立つものなのです」とつけ加えました。

並木さんによれば、「エストニアの人々は、日本人と同じようにシャイで控えめなタイプが多いのに、積極的に起業しようとするパワーがある」とのことです。一方、Ms. 先生は「日本の女性たちもすばらしいポテンシャルを秘めている」と称賛するとともに、「人生は順調にいくものではなく、常に浮き沈みがあります。何度倒れても、また立ち上がれば大丈夫。前向きに、一つずつ課題に取り組み、経験を積み上げてください」とアドバイスを送りました。また、「先生も「エストニアの起業家精神の源は、自

返ります。

卒業後にアメリカの大学に進学した並木さんは、「東京女学館で学んでよかった」と思う場面が何度もあったそうです。「国際学級は英語を学ぶための場所というよりも、英語を使って世界を知る場所です。教室で勉強するだけではなく、美術館や博物館に行く機会も数多くあります。日本の文化や歴史、世界中の神話や社会問題など、幅広い内容を学ぶことができたため、留学先で文化を紹介したり、社会問題について議論したりする際も、会話に困ることはありませんでした。女学館で学んでいたときは実感していませんでしたが、教養を身につけるのは、海外で学び、働くうえで、とても大切なことだと思います」

最後に、ブルネリ先生と並木さんは、受験生に以下のようなメッセージを送りました。

「国際学級は、並木さんがお話したとおり、英語が上手になることを目的とした学級ではなく、自分の夢のために英語を身につける学級です。小学生のうちはまだはっきりとした夢でなくても構いません。将来、英語を使って何かにチャレンジしたいという方は、ぜひ本校を一つの選択肢として考えてほしいと思います」（ブルネリ先生）

「東京女学館は、興味・関心を広げるような取り組みを数多く行っています。私がエストニアに興味を持ったのも、学



国際副教頭 クリスタル・ブルネリ先生



高1の夏休みには、全員がポストリーダーシップ研修で現地の名門大学を訪ね、講演やワークショップを経てキャリア意識を高める

ンパスツアーなどを通して、キャリア形成への意識を高めていくという内容です。「卒業生を通じてつながることができたエストニアの教育に刺激を得て、海外研修の充実を図るなど国際学級の学びにさらに磨きをかけていきたいと考えています。」とブルネリ先生は話します。

並木さんの代では、全員で行く海外研修の行事はなく、「今の生徒がとてもうらやましい」と微笑みます。そんな並木さんは、帰国子女として中1から同校に入学。いくつかの学校を見学して「絶対にここがいい！」と直感で選んだと言います。「学校の雰囲気や、生徒たちの楽しそうな様子にひかれたのだと思います。実際に入学してみると、6年間同じクラスということもあって非常にアットホームな校風で、みんな友だちだけど、家族でもあるという感覚でした」と振り

国際学級ではディスカッションベースの授業やエッセイ・ライティング、英語劇なども行う



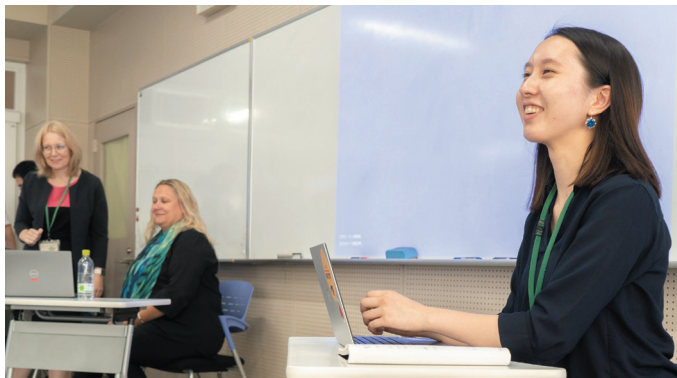
校で取り組んだ模擬国連で、リトアニアの大使を担当したことがきっかけでした。そこからバルト三国に興味を持ち、今ではエストニアと奈良県を行き来しながら、両国をつなぐ仕事をしています。英語を使って夢をかなえたい、一生の友だちをつくりたいという方には、ぜひお勧めしたい学校です」（並木さん）

安田教育研究所・安田理先生の

女子伝統校のここが 魅力



「国際学級」「グローバルコース」と言えば、想定する進路は「海外大学」「国内大学の国際教養学部」とほぼ決まっている。東京女学館は「国際学級」を2クラスにすることで理系への進学希望にも応えることになった。政府も経済界も理系人材の不足を嘆いている今、大学もリケジョを増やすべく多くの大学が「女子枠」を拡大している。今回東京女学館の打とうとしている施策はまさに時代にふさわしい手と言っていだろう。



左から、エストニアから来日したLy Höbe先生とMari Taalman先生、卒業生の並木真衣さん。日本の女性は多くの可能性を秘めているという